

○大西隆会長の就任に当たっての所信

去る10月3日に第22期日本学術会議会長に選出された大西隆です。新会長として3年間の任期をスタートするに当たって所信を述べます。

日本学術会議は、1949年1月、科学が平和の下での復興を目指す文化国家の基礎であるという確信の下で、わが国の科学者の内外に対する代表機関として設立され、その目的は「科学の向上発達を図り、行政、産業及び国民生活に科学を反映浸透させること」と日本学術会議法に定められています。このために、あらゆる分野の指導的科学家を結集して科学に関わる重要事項を議論し、得られた結果の実現を図ること、あるいは科学の振興、科学研究の成果の活用、科学研究者の育成、科学を行政や産業や国民生活に反映させる方策について、最新の知見を踏まえた勧告を政府に行うこと等、様々な活動に取り組んできました。それらは、科学の発達が国内外の人々の生活を豊かにし、かつ平和な暮らしをもたらすという信念に裏付けられたものであることはいまでもありません。

しかし、この信念は、絶えず試練に曝されざるを得ません。科学が平和以外の目的に悪用された例、あるいは科学的知見に基づいた成果が引き起こした事故が人間に災厄をもたらした例は歴史上に少なくありませんし、今日なお繰り返されているといわなければなりません。特に、先の東日本大震災では、まちづくりの脆弱さ、防災施設の無力、あるいは科学技術の結晶ともいふべき原子力発電所の崩壊等を目の当たりにし、科学を十分に深めて適切に応用していくことが容易ではないことを思い知らされました。日本学術会議は、科学・技術の今日的な限界を再認識し、科学・技術の在り方に反省を加えることを出発点に、あらためて被災地域の復興はもとより、日本社会、さらに世界の持続的な発展に向けて科学・技術の果たすべき役割を追求したいと考えています。

日本学術会議は、これまで、科学・技術のそれぞれの分野の政策の在り方や研究活動に関し、政府に対して勧告や提言を行ってきましたが、社会から科学・技術が信頼されるためには、さらに国民が科学・技術に何を期待しているのか、生活にとって科学・技術がどのように役に立つのかについて国民との対話を通じて科学家自身が理解を一層深めていく必要があると考えています。

他方、科学者のコミュニティーにおける日本学術会議の役割という点に目を向けると、学会や大学における科学的研究の実践と強く連携しつつ、経験を積んだ科学者の学際的な組織である日本学術会議ならばこそ可能な活動を行うことに存在意義がある点を自覚し、その役割を定めることが必要です。

我々第22期会員は、こうした認識に立ち、科学家としての社会的責任をしっかりと自覚し、自らの学問領域にのみ閉じこもるのではなく、積極的に他の分野とも協力して、210名の会員、約2,000名の連携会員の力を合わせて、日本学術会議が所期の使命をはたすことができるように力を尽くす決意です。多くの市民のみなさまが日本学術会議の活動に関心を寄せ、また、ご支援をいただくことを心から希望しております。